

学生海外調査研究	
テレビメディアにみる身体表象とジェンダーに関する分析・考察	
英 美由紀	比較社会文化学専攻
期間	2009年9月8日～2009年9月25日
場所	イギリス
施設	オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、British Film Institute

1. 本研究に至る経緯

身体を社会の規範や権力構造の交差する構築物とみなす近年の思潮は、女性の化粧やファッションといった身体の外見にまつわる現象を、個人の欲望としてではなく、社会の枠組みにおいて分析する研究の一領域を形成している。これらの日常的な身体実践を、社会のジェンダー関係に根ざした権力の作動として、体系的に論じることを可能にするためである。

こうした研究の中でもきわめて現代的な例として近年議論の対象とされ始めたのが、患者の大半を女性が占める美容外科手術である。このような研究動向において、筆者は博士論文のテーマを身体の外見、とりわけ美容外科の施された身体の文化表象の分析と定め、執筆を進めてきたが、これまでに明らかになったのは、以下の2点である。

① 美容外科に関する現在の理論動向の整理

身体の外見を議論するための理論枠組みについては、英語圏を中心に複数提出されているが、1990年代前半以来の断続的な議論にもかかわらず、いまだ合意に至らない面を残す。すなわち美容外科手術などの施された身体が、ジェンダー等に根ざした権力関係の単なる上書きに帰すのか、或いはそれを掘り崩し、再構築もし得る潜在的な可能性も有するののかという点である。これまでの研究では、こうした意見の対立をもたらす論点を明確にした。

② 英語圏、及び日本における美容外科の表象の分析

①で見たように、この問題に関しては欧米を中心に理論的な精練も進み、議論の素地は整っていると考えられる。とは言え、美容外科を中心的な主題とする研究は、現在のところ、(医療分野を除けば)文化史や社会学等の領域が大半を占め、表象領域に関する場合も、分析の対象を主として商業広告とするなど、文学・映像テキストを体系的に考察した研究はわずかである。

しかしこうした表象の諸領域は、フィクションの形式や様々な視覚効果等を採用しながら、身体とその変容を比較的自由に(時には現在の医療水準や実現可能性をも超える形で)描くことが可能である性質を持ち、当該時代の(または時代に先駆けて、新たな)身体のあり方を提示する点で、注目に値する。そこでこれまでの研究では、20世紀中頃から現在に至る、英語圏及び日本の表象テキスト(小説、映画、コミック)に、①で見た理論の変遷が反映されていることを跡づけるとともに、現代ならではの身体性が提示されていることを明らかにした。分析軸としては、ジェンダーに加えて人種も採用したが、いずれも女性登場人物の身体に焦点を当てる議論であり、男性身体の問題は取り上げなかったことから、本研究のテーマとして新たに設定した。

2. 本研究の主旨

身体の外見を社会の規範や権力構造(とりわけジェンダー)との関係から問題化する視点は、歴史をさかのぼれば、既に18世紀後半のイギリス人思想家メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft)の著作『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792)に見られ、これは20世紀に入り、シモーヌ・ド・ボーヴォワール(Simone de Beauvoir)の『第二の性』(*The Second Sex*, 1949)や、60年代以降アメリカに牽引された女性解放運動の主張の一部にも、理論的に連なるものとなった。その後ミシェル・フーコー(Michel Foucault)により、日常の言説実践を通じた権力のあり方が提示されると、身体は社会規範や権力構造を読み込むことの可能なテキストとみなされ、ダイエット等、女性の身体実践が議論の対象として焦点化されることになった。ここでは身体を規範や権力の書き込まれる場とする立場から、これらの行為には否定的な評価がなされていたが、近年身体が新たに抵抗・反逆も可能な場として再概念化されたことにより、個人の身体と社会構造間との関係が再考されるようになって

た。美容外科手術を女性のエンパワーメントの契機として、肯定的に捉え直す姿勢を打ち出したキャシー・デイヴィス (Kathy Davis) の一連の論考は、こうした理論枠組みの変化を反映するものである。

以上のような理論動向において、美を特定のジェンダー (すなわち女性) の属性として構築してきた文化言説の可視化・攪乱の潜在力を有するモチーフとして、筆者は男性の身体に着目した。そして美容外科の対象としての男性という題材は、20世紀前半以降の欧米の表象テクストの一部に見出せることから、本研究ではまず英米の小説・映画作品を分析の対象とした。これらの作品では当初、美容外科を女性と結びつける社会の言説に沿い、男性登場人物をあたかも副次的な存在であるかのように描くことで、その身体を前景化することを妨げる政治的な配慮がなされていた。しかし美容外科の発展や一般への浸透という時代の趨勢にともない、徐々にその身体が操作の対象として顕在化する経緯を見て取ることができた。そこで本研究は、男性身体を美容外科の対象として描いた表象作品の系譜をたどり、それを時代の変化と関連づけることにした。またとりわけ近年の2、3のテクストに、美容外科をめぐるジェンダー言説の攪乱・再構築の可能性を模索したが、ここにテレビドラマも加えることにした。現在の社会的動向に敏感に反応するテレビのメディア特性に注目したためである。

以上の研究においては、文学に加え、映像作品を研究の対象とし、その資料を入手する必要があることや、また現時点までの研究成果を国際学会で発表したい希望があったことから、本プログラムの支援を仰いだ。

3. 調査研究の内容と成果、今後の展望

① 美容外科における男性のジェンダー位置に関する考察

欧米の文化において、美やその獲得を目的とする種々の実践は、歴史的に女性が関わるものとされてきたが、それは美容外科手術についても例外ではない。美容外科の患者の約9割を女性が占めることを示す調査データもあり (Gilman 35)、女性の身体を医療化する言説が構築されてきたことも指摘されている。こうした文化言説において、男性の占めるジェンダー位置は、理想の女性像を象ったとされるピュグマリオン神話の影響もあり、美容外科を施す主体、すなわち医師の側にほぼ限定されてきたと言って良い。逆に客体=患者の側に位置することは、男性性を著しく損なうとして否定的に捉えられ、ここに男性の美容外科患者は「不可視化」されるにいたったのである (Davis 55, 57)。

このような背景を持つ美容外科において、果たして将来的に男性が主要な患者となり得るかが、近年議論的となっている。現在男性患者は徐々にその数を増しており、いずれ女性を上回るかについては

意見が分かれるものの、歴史的に権力・主体の側に位置し、その身体を客体化されることを免れてきた男性の美容外科への参入は、男性性の規範やジェンダー関係に変化を迫らずにいないためである。

本研究ではまず、第二派フェミニズム以来、社会から要請される女らしさの理想との乖離が批判的に議論されてきた女性身体に比べ、問題化の遅れた感のある男性身体に焦点を当て、美容外科における男性のジェンダー位置をめぐる文化言説の構築の経緯を追った。

② 美容外科の対象としての男性身体の文化表象の分析—小説、映画

美容外科は表象の諸領域でも主題として取り上げられてきたが、その大半は女性の身体の客体化を描くものであった。男性の身体を取り上げる例外的なケースについては、犯罪などと関連づけ、容姿を変えることを余儀なくされるといった設定により、その手術の決断を美の追求と無縁のものとする巧妙な配慮がなされた。ここに、男性が外見の良さを追い求めることに対する「文化的な障壁」(Haiken 155-161) が作用していたであろうことは、想像に難くない。こうしてこれらの作品の主題は、人の外見とアイデンティティの関係や、そこに介入する現代テクノロジーに対する脅威へと、周到にずらされることになった (但しこのような作品においても、男性登場人物の意図はどうあれ、その容姿が施術前より結果的に向上しているという事実は指摘しておくべきだろう)。

しかしある時期以降、外見の向上をはかるべく、男性登場人物がみずから美容外科手術に踏み出すとする設定が、当初はサブプロットとして、後によりあからさまに組み入れられ、そうした状況がジェンダー規範や秩序にもたらす様々な変化を先鋭的に示唆する作品が見られるようになった。ここに、男性がもはや自身を美容外科の主体としてのみ位置づけられず、その身体を客体化せざるを得なくなった時代の変化を読み取ることができる。こうした作品の系譜を概観し、そこに採用されている政治を検証することは、美容外科の言説において「不可視化」されてきた男性患者の存在を前景化するとともに、従来女性と結びつけられてきた美の文化規範やジェンダー関係をおのずと不安定化することになる。

さらに2、3のテクストに焦点を当て、そこでの男性登場人物の身体の扱いを精査し、その美容外科手術の客体としての位置と施術の内容を、既存のジェンダー言説・身体を逸脱するものと意味づけた。美容外科手術は「抑圧しようとしてきたジェンダー混乱を引き起こす」(Blum 86) とされるように、男女の対立的カテゴリーを無効化する潜在力を有する。無論、ここに期待されるのは、単に美容外科における従来の客体的な位置を男性に割り当てることで、ジェンダー位置を逆転することではない。それでは

ジェンダー差異の不安定化どころか、再強化にもつながるだろう。むしろ男女、主客といった、二項対立的な構造そのものを問うことこそが求められるのである。

以上①、②については、‘Reading Bodies/Writing Bodies’をテーマとし、9月11-12日にオックスフォード大学で開催された、The 2nd Biennial Postgraduate Contemporary Women’s Writing Network Conferenceにおいて、‘The Position of Gender in Cosmetic Surgery: A “Conflict” With Regard to Objectification of Men’s Bodies’と題して口頭発表を行い、現時点までに得られた成果として公にした。ここでは合わせて10点程の文学・映画テキストを例に挙げながら、そこに描かれる男性身体の変遷を追い、その客体的な位置が表す逸脱性がジェンダー規範や秩序にもたらす影響を分析したが、詳細は今後論文の形で公表することを希望しており、本稿では以上の報告にとどめたい。

③ 美容外科の対象としての男性身体の文化表象の分析—テレビドラマ

ジェンダーの観点から新たに男性身体に焦点化するにあたり、現在の社会動向に敏感なメディア特性に着目し、テレビドラマを分析の対象に加えた。作品の選定に当たっては、本研究の成果を、先に国立女性教育会館発行の研究ジャーナルに掲載した拙論、「美容外科をめぐる理論と表象」に接続したい希望から、1980、90年代にアメリカで制作された2本のテレビドラマを取り上げることにした。上の論文では、1972年に発表された小説アイラ・レヴィン(Ira Levin)の『ステップフォードの妻たち』(*The Stepford Wives*)を題材に、1975、2004年の二本の映画化作品を比較検討し、その間に見られる身体表象の変化を追った。原作、及び1975年版の映画では、その身体を男性権力の操作の対象とされ、社会の理想とする女性美を体現するしかなかった女性登場人物たちは、2004年版の映画では、男性身体を操作する主体へと変貌を遂げていたためである。

四半世紀余りをはさんでの2本の映画作品を対照的に論じた拙論は、その間の劇的なジェンダー関係の変化を際立たせる点で効果的だったが、実際には同作品はその間も複数回にわたりテレビドラマ化されていたことが知られている。*Revenge of the Stepford Wives* (1986)、*The Stepford Husbands* (1999)がそれであり、これらの作品には、男性身体が客体化されるに至る経緯が段階的に跡づけられるものと予想された。そこで本研究は、2本の映画の間の時間的なギャップを埋めながら、ジェンダー規範・関係の変化をより詳細に検証し、これまでの研究を補完する目的のもとに調査を進めた。

2本のテレビドラマを視聴した結果、原作と1975年版の映画では、夫たちの一方的な操作の対象とな

る妻たちの身体を通し、社会における女性美の規範の強力が印象づけられたのに対し、*Revenge*では夫に練られていた妻側からの反逆という、新たな展開が加えられていたことが分かった。妻たちは自分たちの夫への隷属状態を意図した首謀の男性登場人物を殺害するという、原作とはおよそ異なる結末が導かれたのである。さらに*Husbands*では、従来とは社会的地位の逆転したひと組の夫婦(職業的な成功を収める妻と、それに引け目を感じる夫)の関係において、妻の側が夫の改造を目論むという、原作とは正反対ともいえるプロットが採用されていた。ここには女性の社会進出が進むなかで、男性性の崩壊に怯える現代の男性像が映し出されている。

これらのテレビドラマに描かれる男性身体が、いかに従来のジェンダー規範を逸脱しているか、またそうした状況が男性性をめぐる規範や秩序にいかなる影響をもたらすかについての考察は、財団法人東海ジェンダー研究所発行の2010年度のジャーナル上で発表する予定であり、詳細はその機会を待って明らかにしたい。

4. 日本文化研究の観点から

欧米では1980年代以降、「美容外科時代」に突入したとされ(Wolf 230)、それにもない議論のための理論枠組みも複数提出されてきた。日本でも1990年代に入り美容外科クリニックの数が倍増するなど、欧米を「後追い」する状況が見られ、こうした傾向は今後いっそう顕著になると懸念されることから、積極的に議論が展開されていく必要がある。しかし日本では、女性美や美容行為について、一時いわゆる「ミス・コン」の是非を問う声こそ上がったものの、それが美容外科に関する議論に接続されないまま、美容外科手術の流行の先行を許してきた。したがって美容行為を主題として設定する本研究は、このテーマに関する英語圏を中心とした理論動向を紹介・共有し、日本における議論の活発化を促すための基盤形成に資すると思われる。

こうした理論的な基盤の上に、まず一方のジェンダーのみが美と関連づけられてきた、日本にも共通の文化言説を指摘することが可能になるだろう。また人種という分析軸を導入することにより、白人・有色という対立的なカテゴリーにおいて、前者が美と関連づけられがちであった現代日本で、人種的な身体属性(一重瞼など)が外科的に修正されてきた現象を説明することも可能になるだろう。一方、美容行為はこうした女性美の規範やそれを要請する社会構造を再生産するのみならず、攪乱・再構築する潜在的な可能性も有することが、1990年代以降主張されていることから、これまで日本では認識されることの少なかった、美容行為の多様な意味づけが人々の関心を喚起することも期待される(この点では、最近の社会学の成果である、谷本奈緒氏の『美容整形と化粧の社会学』が興味深い)。

表象の諸領域は、身体の描写を通じ、その時代・社会の身体の文化的な理想やイデオロギーを提示する点で意義深い。本研究が分析の対象としたのは英語圏の表象テキストだが、日本の表象テキストの分析を通じ、現代日本社会における人種・ジェンダーの配置を炙り出すことも可能となる。例えば視聴者参加型のテレビ番組（番組が希望者を募り、術前・術後の容姿を「劇的な変身」として提示する類）などがそれに含まれよう。この場合、テレビを「美容外科の意味が産出される場」（39）として、英語圏の同様の番組を批判的に論じたヴィクトリア・ピッツ＝テイラー（Victoria Pitts-Taylor）らの先行研究が、大いに参考になると思われる。

英語圏と日本の両文化圏に関わる本研究の成果は、今後段階的に公にしていくとともに、最終的には現在執筆中の博士論文第3、6章の各一部として組み入れ、美容外科に関する体系的な論考として提出する予定である。今は本プログラムによる支援と、関係スタッフの尽力に謝意を表し、本稿を閉じたい。

参考文献

- Blum, Virginia. *Flesh Wounds: The Culture of Cosmetic Surgery*. New ed. University of California Press, 2005.
- Davis, Kathy. *Dubious Equalities and Embodied Practices: Cultural Studies on Cosmetic Surgery*. Rowman and Littlefield Pub Inc., 2003.
- Gilman, Sander L. *Making the Body Beautiful: A Cultural History of Aesthetic Surgery*. Princeton University Press, 1997.
- Haiken, Elizabeth. *Venus Envy: A History of Cosmetic Surgery*. The John Hopkins University Press, 1997.
- 英美由紀 「美容外科をめぐる理論と表象—アイラ・レヴィン『ステップフォードの妻たち』を例に」 『国立女性教育会館研究ジャーナル』第12号：63-72
- Pitts-Taylor, Victoria. *Surgery Junkies: Wellness and Pathology in Cosmetic Surgery*. Rutgers University Press, 2007.
- 谷本奈緒 『美容整形と化粧の社会学—プラスチックな身体』新曜社 2008
- Wolf, Naomi. *The Beauty Myth: How Images of Beauty Are Used Against Women*. Harper Collins, 2002. orig. 1991.

はなぶさ みゆき／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻 博士後期課程3年

【指導教員のコメント】

英美由紀さんは、文化表象をめぐる美容整形の系譜学的・理論的・文化学的考察を博士論文のテーマとしており、その完成に向かって着々と準備している。本グラントでおこなった研究は、以下の3点において彼女の博士論文執筆に向けて重要な位置を占めている。第1は男性身体が客体化される過程の文化表象に焦点化したこと、第2はこの分野で重要な小説およびその映画化（*The Stepford Wives*）に加えて、そのテレビドラマ化の近年の変遷に着目したこと（男性身体の客体化が読み取れる）、第3に英国での調査というこの機会を利用して海外での発表に繋がったことである。研究成果は、国内外の学会誌で発表される予定である。本研究は、欧米のみならず日本、東アジアでもその必要性が高く、英さんの博士論文の完成が待たれる。

（お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科 教授 竹村 和子）